
運命のマスティマ ミシェル過去編

鏡 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のマスティマ ミシエル過去編

【Nコード】

N2842Y

【作者名】

鏡 香夜

【あらすじ】

十歳のとき、マフィアの抗争に巻き込まれた私。救ってくれたのはマスティマという闇組織。

恩を返すべく組織のコックを目指して、いざ修行開始！

料理習得のために国々を回る。世界は広くて、色んな人がいて……？

「運命のマスティマ」の主人公、ミシエルの修行時代、奮闘記。

（シリーズものですが、この話単独でも読める内容になっています）

1・あの夜

十年前の夜、父と私はマフィアの抗争に巻き込まれた。

父は小さな料理店の経営者にして唯一人のコック。そして、当時の私は、ようやく自分でおさげ髪を満足に結えるようになったばかり。若干十才の少女でしかなかった。

その夜は、貸切りの予約客がいて、私も顔見知りの人だった。

ウェイトレスの真似事を始めていた私は、大好きな父の手伝いをしたくて、無理を言って店に入り込んだ。

それがあんなことになるうとは……。

飛び交う銃弾。男達の怒鳴り声。弾けるガラス。テーブルは押し倒され、椅子も床に転がった。

何が起こったのか分からず、茫然と立ちつくしていた。私を守るために父は被弾した。

混乱した状況から私と父を救ってくれたのは黒いコートの人たち。それが闇組織マステイマだと知ったのは後になってのことだった。彼らは襲撃者を倒し、狙われていた人物を助け出した。

それがレストランの常連客だったブルーノさん。祖父の代から店に来ていたというこの人は、父とも親しかった。

「やあミシエル、元気かね」

こんな風に、子供の私にも気さくに話しかけてくれる、優しいおじさん。

黒い髪に黒い口ひげを生やし、お洒落にスーツを着こなしている。小物使いもさりげなく、シックだが存在感のある指輪をいつも身に付けていた。トレードマークのハットにステッキは見るたびに違うもの。

いつもスーツ姿の二人の男と一緒に店にやってきた。

そんな彼がイタリアでも指折りのマフィア、マロッチーニ・ファミリー・のボスであることなんて知らなかった。

まだ十才だった私。知識なんてほんの狭い周りのことのみ。
父が撃たれた時もできたのは泣くことだけ。非力な子供でしかなかった。

父の店で襲撃を受けた夜のことは鮮明に覚えている。守られた私だけが無事だった。ブルーノさんやその部下達も銃弾を受け、同じ病院に運び込まれた。

鳴り響く救急車のサイレン、慌しく処置をする医師や看護師達。
病院の匂いや手術室の場所だって忘れていない。

父の手術は成功して、次の日の昼には意識を取り戻した。山は越えましたとの医師の言葉だったが、母は看病のために病院に泊まりこんだ。私は家に帰ったが、学校が終わるとすぐ祖母と共に見舞いに行った。

父の容態が急変したのは三日後のこと。

その時の記憶は、はっきりとしない。病院にいて、父のベッドに駆けつけたはずなのに。

悪い夢を見て、目覚めるとそれが何だったかを忘れてしまった時のようだ。

最初に気付いたのは祖母だった。なんの変哲もなく訪れた朝。ベッドから起きだして朝食をとり、いつもどおり学校に行こうとした私を引き止めたのが彼女だった。今日は葬儀の日だからとの言葉を私は啞然として聞いていた。

棺に移される前、病院での最後の面会で繋がった前日までと今。静かに横たわる父の姿を目にすると、涙が溢れて止まらなかった。父を失ってしまったという悲しさで押しつぶされそうになりながらも、私は自分の無力さを感じていた。同時に私のせいなのだという思いも募った。

私をかばって父は倒れた。一人だったら、裏口からうまく逃げ出せていたかもしれない。私が店にいないければ、死なずにすんだかもしれないのだ。

誰もそれを口にはしなかったけれど、その考えに至れないほど私は幼くもなかった。

憔悴した母の顔。いつもは、はつらつとして明るい人なのに。私を氣遣って笑顔を見せて話しかけてくる。子供ながらに苦しかった。変わらず接してくれる祖母にも心の内を話すことができなかった。祖母が責めたのはブルーノさんだった。葬儀にやってきた代理人の参列も許さなかった。

ブルーノさん自身はその時、まだ入院中だった。銃弾摘出のための手術が必要だったのだ。

術後一カ月、退院した彼は、すぐにうちにやってきた。杖をつき、部下に支えられながら。

だが、祖母は玄関先で箒片手に追い返した。周りが慌てるほどの辛らつな態度だった。

マフィアだろうとなんだろうと祖母には無関係。祖父の友人でもあり、古くからの知り合いである彼に容赦はなかった。

それでもブルーノさんは何度も家にやってきた。父の死の責任を取ろうと、私の後見人を名乗り出た。

祖母は良い顔をしなかったが、私は彼の申し出に甘えた。家にて、彼女や母と顔をあわせていると辛かった。

父の死で、ぽっかりと心に開いた穴。それは彼女達にしても同じだったと思う。その時の私は自分のことだけで精一杯で、なにもできなかつたけれど。

逃げるように屋敷にやって来る私に、ブルーノさんは優しくかった。事件のことは一切触れることはせず、毎回私が喜びそうなお菓子を用意して待っていてくれた。

マステイマの話はブルーノさんの前ではご法度だった。言葉を重ねるたび、空気が重くなっていくのを感じた。詳しく尋ねる事なんてできなかった。

こつという雰囲気になるのは、関わるなどの無言の圧力だ。マフィ

アや麻薬等の話も同じ。とたんにブルーノさんの声はずっしりとした石のようになった。

それは子供の私には、どんな言葉よりも雄弁なもの。

それでもマステイマへの思いは、ともし火のように、細くなることがあっても消えることはなかった。

彼らがいなければ、私もまた死んでいただろう。父にも短いが三日間という時間をくれた。その間に交わした会話の数々は今でも心に残っている。

今の私があるのもマステイマが来たからこそだ。あの夜の無力で脅えた私とは正反対の存在。

彼らに近付きたいとは思いつながらも、どうやったら関われるのか、分からずにいた。父を亡くして間もない心は沈みがちで、持ち前のきかん気も影を潜めていた。

慰めだったのは、ブルーノさんの屋敷の庭で、飼われているラッテという名のクリーム色のマステイフ犬と遊ぶことだった。余談ではあるが、このラッテは後にネーロとカフェラッテの母親となる犬だ。

がつしりとしていて頼りがいがあるのに、他ならぬ母性を感じさせる、この優しい生き物に私は救われた。

ブルーノさんが留守のときも庭に入れてもらい、ラッテと過した。ラッテは有能な番犬の一頭だった。

人に懐かせることに対して苦言を呈する部下もいたが、ブルーノさんは「あの子のしたいように」と許してくれた。

最初、受け入れてはくれなかった他の犬たちから、身を張って守ってくれたのもラッテだった。

彼女は私の守護者だった。膝を抱えて座り込む私の傍にいつもいた。二つの後ろ姿は、まるで二頭の犬のようだとブルーノさんは柔らかに笑ったものだ。

彼女の落ち着いた息遣いや穏やかに打つ心臓の音、私の頬を舐める柔らかい舌と愛情深い黒い瞳が大好きだった。

何時間でも辛抱強く付き合ってくれた。言葉など超えた理解がそこにあったように思う。

犬舎の中で寄り添ったまま眠ってしまい、そのまま夜を迎えて、行方不明になったと心配されたこともあった。

服を涎だらけにされたり、泥まみれになったり、母に眉を寄せられたことも一度や二度ではない。だけど、この時、私の支えだったのはこのラッテだったとはっきりと言える。

私は癒やされ、次第に父と共に失くした物を取り戻そうとしていた。

そんなときだった。自分の進むべき道を知るきっかけが訪れたのは。

それは自然でありつつも劇的な出会いだった。

1・あの夜（後書き）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

2・魔法の国

庭に流れてきた刺激的で芳醇な香り。これはニンニクと唐辛子。源はきつとアーリオ・オーリオ・エ・ペロンチーノだ。

夕食前だった私のお腹が何よりも正直に反応する。その音に傍にいたラツテが驚いたほどだ。

お腹を押さえながら、そろりと地面から立ち上がる。

父も家でよく作ってくれたっけ。そのペロンチーノの匂いによく似ている。私は引きつけられるように匂いの流れてくる窓に寄っていった。

窓の向こうには白衣の背の高い男の人。コツクの姿だ。ブルーノさんより年配そうだが、その背筋はピンと伸びている。痩せ型で灰色の薄い頭髪。細い眉は神経質そうに見える。

彼は窓の外に私の顔を見つけると、微笑んだ。

「お嬢ちゃん、お腹すいてんだろ。入っておいで」

そう声をかけてくる。

これがブルーノさんの家の料理人、レオ・デ・サンティスとの出会いだっただ。

レオの料理は父のものとは、まったく異なっていた。

まともがあつて優しい父の味に対し、おおらかでエネルギーを感じさせるもの。

それは、何かにつけ彼の料理を味わうようになった私の実感だった。同時に興味がわいた。

父とは違う白衣姿。料理をする彼の背中を見るたびに、うずうずと高揚した気分になった。

父の死後、墓場のように感じていた厨房は、春を迎えたように息吹に満ちた。これこそ魔法の国だ。またここに戻ってこれようとは。

間もなく十三歳になろうとした頃、私はレオに料理を教えて欲しいと申し込んだ。

私にはおそらく他に才能はない。だけど、料理人としてなら、きつとやっていける。腕を磨けばマスティマのコックにだってなれるかもしれない。そう確信めいた思い込みが私を衝き動かしたのだ。

あの夜の事件で、ブルーノさんは脊椎を痛め、やがて車椅子に頼ることになった。そんな生活を少しでも豊かにしようと部下が捜してきたのが、レオだった。

ブルーノさんより七才年上のレオは、ホテルの料理長を退職して間もなかった。何人もの後輩を一人前に育てた実績は伊達ではなかった。

中学校の放課後、駆けつける私を決して子ども扱いしない。彼の信条は、厨房に立てば男も女も若いも老いもないというものだった。最初は掃除や皿洗いに始まり、下ごしらえと徐々にやることがランクアップしていった。

間違ったことをすればマシンガンのようにノンストップで咎められる。弁解の暇なんてない。私は力カシのように突っ立ち、嵐の過ぎ去るのを待つだけだ。

だが、彼の求めに応じることができると、これまた盛大に褒めてくれるのだ。

「お前は天才だな、ミシエル」

私の頭をわしわしとかき混ぜる。三つ編みに結った髪が一気にボサボサになってしまう。

上機嫌に笑い声を上げるレオは、この時ばかりは印象がまるで違う。一見、偏屈な頑固親父のように見えるのに。

飴と鞭は使いよう。まさにその言葉を実践しているような人だった。

レオ以上に私を後押ししてくれたのは、厨房を訪れる、一人の客

だった。

「お腹すいたー。なんかなーい？」

そう言って、駆け込んできて、行き倒れのようにテーブルに突っ伏す。

私の姿を見つけて、顔を輝かせるこの子はソニア。ブルーノさんの孫娘だ。

最近近所に越してきたという彼女は、毎日のように祖父の家を訪れた。彼女曰く母親の料理よりもレオの料理の方が美味しいからだそう。

Tシャツにデニム地のオーバーオールという服装。短く刈られた栗色の髪のせいで、男の子と間違えられることも多いらしい。

ややつり目な瞳とちっともじっとはしていない様子は、イタズラ好きの子猫のよう。

平均の身長より低く、私より一回り小さい体は、彼女の炎のような気質を覆うには頼りないように見えた。

いつも喧嘩に勝って、誰それを泣かせたと得意げに語っていた。しかもその名前からして、みんな男の子。

彼女の体には生傷が絶えず、服が破れていることもしばしばだった。

「みんな弱っちーもん。敵じゃないよ」

ぱっぱと服をはたきながら、あっけらかんと笑う。頬の絆創膏は勲章みたいなものだ。

私より一つ年下、一人っ子だという彼女は私を姉妹のようだと慕ってくれた。

レオに料理を習い始めて、最初に作った料理を味わってくれたのも彼女だった。

オーダーはミラノ風リゾット。

スプーンが口に入るまでドキドキだったが、ソニアは目を丸くして言った。

「爺じいにも食べさせてあげないと。私だけ食べたら、きつと怒られる

よ」

そう言いながらもスプーンは止まる様子を見せない。一気に食べ上げてしまう。

何よりもの賛辞。あまりの嬉しさに彼女を抱きしめた。

この日から、ソニアは私の試験官になった。

彼女の言葉は率直で、ごまかしがなかった。レオも認める味覚の持ち主で、決して中途半端なことは口にしない。不味いときは不味いとはつきりと言われたし、一口目の表情を見たら分かる。へつらつての二口目なんて決してない。

それでも、美味しいときにはこちらが舞い上がってしまうほど褒めてくれるのだ。

天井を見上げての感嘆の声。「ほっぺが落ちそう」とか「美味しくて死んじゃいそう」とか。

飛び切りの笑顔で料理を頬張る彼女を見るのが、私の一番の原動力となった。

人に喜んでもらえる物を作りたい。当時のことを振り返ってみると、料理人の原点ともいえるその思いは、この頃培われていたように思う。

2・魔法の国（後書き）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチッとお願ひします（ランキングの表示はPCのみです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842y/>

運命のマスティマ ミシェル過去編

2011年11月14日03時31分発行